

卯辰新地

泉鏡花作

一

「お氣をつけ遊ばしていらつしやいまし。」

「難有う存じます。」

「お世話でした。」

「御機嫌よう。」

口々に送出す、當地の所謂仲居の世辭を、蛇日傘で受けて背後に聞き、行く春の夜の小雨を、柳のやうに肩に掛けた。一枚小袖で、羽織ながら瘦せたのが、微酔の低下駄を引摺つて、轉んだら起きるまで、投遣りな歩行方、いまの家から持たせて出した、かなで紅梅と書いた提灯を片手に提げ、足許を見るでもなければ、ゆくさきを照らすでもなし、提灯の方でも、これでは役不足だから、茫とふてゝ、ともし立の蠟燭のまだ薄暗いのが、裾へ掛けて、朦朧とした影は、狐が尻尾でちら／＼と化しかけるやうに見える。處も稻荷河岸　――松並木の土手づたひ、當市の卯辰の廓に近い。水上は北の空に、尚ほ雪の

峰、水晶の嶽に包まれながら、波は夕の花、流は艶
な、浅野川と云ふのゝ縁を、ぶら／＼と辿つて来た
が、

「邪魔だ。」

と、柄を取つて口の端、何、提灯は要らない
と言へば、然う云ふことをおつしやる方に限つて、
屹とお怪我を遊ばします、遊ばちぱつ。・・・
氣障を言ふぜ、手前、山中に踏迷ひ、孤家の炬火ぢ
やないが、此奴を目當に、二つ弾丸でドンだらう、
ふゝゝ。

ふつと消す、と水へ一筋、紅い光の流れたのは、
消え際の灯の餘波でない。川向うの暗夜の空へ、卯
辰山の影を背負つて、恰も其の半腹を照らす如く、
燦爛と輝かした廓の女紅場に催しつゝある。菖蒲踊
と云ふのゝ電飾が、中洲越に流れたのである。

其の流れへ、ファイと投げ込まうとした提灯の手を、
傘の柄で留めて、

「すねるなよ、酔拂。――逢へないたつて、
誰が知るもんか。」

と、太く嘲つて、獨で苦笑すると、其の提灯の柄を帯に、羽織の下へぐい、とさした。

「こゝ等が相當の恰好だ。生意氣に他の深切を無にする奴があるものか。――屹とお怪我を遊ばします。……しかし言ふ事が氣障だな。あゝ暗夜の方が故郷の道らしい。躓くものか。」

で、點した時より、確乎した足蹈で、づか／＼と歩行出した。が、暗く成ると、ふと妙に、水が高鳴をして響くのに、雨もやゝ降増るか、しと／＼と傘の音。

濡地を引く下駄、ひたついて効性が無さう。

時々大粒が交るのは、二株、三株、心覚えの土手の松から滴る雫の、色は緑、姿は露。で、濡れるも風情だと思ふうちは可かつたが、水の香が芬として、ふと吹きもしない冷い風が、さつと酔顔を拂つたのを、こゝに一本面影を水に誇る、年のころ二十ばかりの柳が、と心覚えに氣が着くと八ツと思つた。

「待てよ。」

時に一個、市の中央なる昔の城の用水が町々へ分
流し、大路小路を蜘蛛手に走つて、此の大川の落口に
架けた橋がある。長さは縦に二間ばかり、庭に物
敷寄な八ツ橋の一渡りに過ぎないが、菖蒲踊と聞く
ものを、あの紫の影も映せ、此の暗さで何も見えぬ。

狭い河岸の真中に、一方は直ちに急流に灌ぎ、一
方は裏町から人の家の廂合を抜けて落ちて、水の横
町と言つても可い、其の兩方とも道とすれ／＼、丁
ど此處で土手も切れ目だのに、欄干どころか、紙を
壓へる卦算ほどの仕劃もしてない。

瀬に立つ水が近いから、渡れば橋板が揺れさうに
思はれる。

「これは、危いんですね。」
晝間通つた時、連れだつた、若旦那に然う言つと
「え、危うございますとも。つい、此の櫻時で
した。……宴會がへりの若い藝妓が、ほんの
貴方、串戲のやうに一足踏外して其ツ切流されてし
まひましてね。……可哀相な事をしました
よ。」

「飛んでもない事ぢやありませんか。何處の女で
す。」

「東新地のうれつ妓でしてな。」
と、言つた。向う河岸の、あやめ踊の連中で、東
京だと柳橋と云つた場所柄である。

「眞個、夢のやうな話です。……紅梅に座
敷があつて、其の歸路だつたと言ひますよ。酔つて
居ましたつて。でなけりや暗夜でゞもある事か、朧
月夜。尤も雪解ですから、水も、もう一嵩あつたん
です。」

ながれの身と聞くも果敢ない。水の泡を寂しく見
ながら、……此の橋際に立つた處へ。媚めい
た圓鬘と肩を並べて、向うから來掛つて、

「やあ。」

と酒機嫌の高調子を掛けた男があつた。……
柳生銚三が今度の旅行で、中仙道北陸道を見知越の、
商況視察と云ふ、大元氣な喇叭酒の横肥りした若い

紳士、唯今御携帯の令夫人は、汽車の中には見えなかつた手荷物であつた。

「これは。」

と、柳生も、微笑の顔を合すと、インバネスの袖を拂つて、洋服の腕をぐいと出して、

「大奇遇、あツはツはツ。だが、しかし危い橋だね。越後で汽車から覗きましたな、親不知、子不知ですわい。」

と、怪しからん、其處で、友染のびらりとした手を曳いて、橋を渡つて行過ぎた。

無常が戀に成つたつけ。――

其の橋、と晝間と同じ柳の下で、ふと心着くと、後髪を曳かれたやうに、足が前へ出なくなつた。

「さあ、逸まつた。何だつて提灯を消したらう。」

はじめから暗いなりならまだしも、懨じ燈があつたゞけ、急に一寸の前も分らない。――屹とお怪我を遊ばします。――可厭だな。」

と、悚然とする。……傘に枝垂れて、千筋の絲で、空へ釣上げられるやうに足が浮く。其の枝

の細いのは、裾が早や、さら／＼と流に洗はるゝ、
と知つたゞけに、うつかり樹の下をさへ離れられな
い。

唯、提灯を腰に、蛇目傘をさしたなり、柳の絲で
宙にぶら下つたものが出来た。此のまゝ苞にさすと、
初卯の土産。

「いや、串戯處でない。」

傘を疊んだ。濡れるなんて厭うては居られぬ。も
のもあらうに、欄干のない暗の小橋を手探りと成る
と、這はねばならぬ。稻荷河岸で四ン這。

「まさか。」

で、傘を得ものにした。で、覺束なさうに柄を
突張つて、杖めかいて按摩搜りに、がさ／＼と突出
す途端に、雲も蓬な峰へ、風が吸取えて、向う河岸
の電飾が一齊に消えたのである。ために、目潰を啖
つた體で、傘の出端を挫かれた・・・ばかりで
ない、消えた時の電燈が、却つて閃然と瞳を射たの
で、彼は猛然として幼い時の可恐い雷雨を思起した。

然も此の裏町の、同じ横川に臨んだ小座敷である。
七歳が學校がへりに、同級のに誘はれて、つい行つた事もない其の家で、はさみ將棋をさして居ると、手が見えないまで、黒雲が舞下つた。流が眞蒼に成ると、時ならぬ大雷に殆ど絶入つた事がある。其の頃は此の横川から龍が上つたと風説した・・・其の時の我家の戀しさ、遠く父母を呼んだ心を思へ。

今も戀しい。二昔以前にあつた我家のあたりを、暗中に透かす方に、川のやゝ下流に架した大橋の形が朦朧として顯れる。橋の上を、紺蛇目傘、番傘、女も交る澁蛇目傘が打重つて、欄干あをき薄月を雲の徂徠ふらしいのが、袂に蔽ひ、裾にかばつた三つ四つ提灯の灯に描かれて、宙に、ふわ／＼と小雨に映つたと思ふと、やがて掻消えて、ふつと無く成る。それが大方は賑ふ町の今夜の最後の人通りであつたらう、・・・新地は近し、四條あたりの春雨に擬へて、媚かしく艶に、相合傘もあるべき景色の、如何ならむ、狐の嫁入じみたのは、柳にイんだ目の寂しさである。

氣の又滅入る事と云つたら。

振向いて密と電燈飾の消えた女紅場のあたりを視
れば、裏の山が漆の如く雨に艶やかに成つて、峰の
樹立が雲に染む、―― あゝ、あの裡に觀音の御
堂が、と思ふにつけても、其の御堂に行く路傍で、
薄の中に秋の茸を搜るとて、ふと、とぐる巻いた蛇
を見た。錆びた鎌が胸中に乗つて居て、灰色の蛇は
陶器のやうに硬直して、そして鎌首を立てゝ居た。
めら／＼と舌が動いたと一目見ると、小兒は崖を轉
がつて、上流の橋の上まで落ちたのを、夢のやうに
思出す

柳は冷い。

ざわ／＼と鳴る水に、搦れ死んだ藝妓の姿が仰向
けに眞蒼に映つて、其の解けかゝつた帯の上を、水
が蛇に成るか、する／＼と黒く走る。

銚三は、窄めて持った傘をバツタリ落して、思は

ず兩掌で、小兒のやうに面を包んだ。

「今晚は。」

「貴方、今晚は。」

しつとり濡心地の帽子の上から、媚かしく不意に然う言つたのを、身近に、青柳の縫れた中と思ふにさへ、簾越に然も二階か何ぞ、高い所から響いたらしく聞取つた。彼は心を鎮めよう、として、折から踞んで居たのであつた。

「え。」
「—— 餘り思掛なさに、少なからず怯えた中にも、あゝ、此の川添の片側町の、飛々ながら、物數寄な紅い格子に蘆蓐、晝も二階の兩戸を閉めた、小造な何の家も、かくし妻、妾などの住居だと心得て、扱は其の一件が、こゝへ手筈の、忍夫と間違へたに相違なからう……」

「私……人違ひぢやありませんか。」

「否、貴方。」

「旅のものです。私。」

「はあ、存じて居ります。」

「誰方？」

「私？」 と却つて先方が聞返す。

「貴方は？」

「私は……」

柳の枝に縋つたらしい。振仰いだ眉の上、亂れた
浅い葉の中に、白い手さきが幽に見えて、黒髪は、
緑の濃い中に隠れながら、

「幽霊です。」

「串戯おいひなさい。」

手先の葉を、宛然みだれ髪を掴つた如く、頭から
蔽はれ掛つて威して居ると見て取りつゝ、其の葉の
頬を掠めて枝垂るゝのを構はず起つた。――手が
消え、裾を圍つて褻に提げた傘の氣勢がある。・
・・銚三の目は、やゝ暗夜に馴れたのである。
雨は小留んだらしい。降つて居ても、柳が吸つて
消すのであらう。緑は重いほど濡まさつて、そして、
ほんのりと薰がした。

「だつて、怨めしいんですから。」

「何が。」

「貴方はお怨な方ですわ。」

カチリと轆轤の閉つた音。．．．．柳は、髣髴として婦人に成つた。

「．．．．何にも知らない、迷惑です。」

「えゝ、何うせ、御迷惑は知れて居ます。ですが、でずけれども、瀧出さんがお誘ひ申したのを納得なすつて。」

聞き掛けて、此はと思つた。瀧山と云ふのは、遠いが、彼には縁續き、若旦那と云ふのは其で。今まで紅梅に一所に居た。――雨と言ひ、夜と言ひ、遠近の初蛙、珍しいまでの酔心地に、一人で、すきな、恣な、物思に耽りながら歩行いて見たいと言ふ廉で、分れて先へ歸つたのである。――氣心を知つて頷いて、若旦那は手枕しつゝ、あとに残つた。．．．．一座に、しかし、いま聞く聲はなかつた。．．．．顔は水より臙である。

四

聲こゑに柳やなぎの葉はが觸ふれて、

「……あの、踊をどりを見物けんぶつに来て下くだすつたんですもの。皆みんなが未熟みじゆくでも、不束ふつゝかでも、些ちつとは觀みて遣やつて下くだされば可いいのに、……怨うちめしいぢやありませんか。」と立直たちなほつたらしく、すつきりと言いつた。

聞きくものは、はじめに心こゝろに頷うなづいた。

「あゝ、あやめ踊をどりの御連中これんぢう。」

「えゝ、其その數かずなりませぬ御連中これんぢう。」

「いや、申譯まをしわけがありません。」

舞臺ぶたいなる、もみぢに錦にしきの袖そでが散ちつても、雪ゆきに狩衣かりぎぬが揃そろつても、櫻さくらに蝶てふが亂みだれても、牝丹ぼたんに獅子ししが狂くるふにさへ、満員まんゐんの棧敷さじき入込いれこみの中に唯ただ一人ひとり、こくり／＼として、時々とき／＼ふら／＼と、のめりさうに、坐睡あねむりをし續つづけた變へんな野郎やらうがあつたと思おもへ。

「何なんとも面目次第めんぼくしだいもない、……決して惡氣わるきぢやありません、實際じつさい堪たまらなく睡ねむかつたんだ。」

「えゝ、堪たまらなくお眠ねむくは誰たれがしました。――

皆、私たちが不束だからなんぞでせう、眞個に口惜
うございますわ。」

「何ういたしまして、貴女方が何の……酒
が不束なんですよ。」

「何うせ、私たちとおんなじに、地酒なんぞご
いますから。」

「因つた、然う云ふ意味ぢやない。飲み方が不束
なんだね。」

「それなれば、酔のお醒め遊ばすやうに、お茶を
時つて行つてあげたんですから……」

「待つて下さい……」

舞臺は、遠見の一軒家、狩衣したのが大勢で、鷺
のやうな足つきで、書割の雪の山路を、しと／＼と
踏んで出た……

「銚さん、お茶を、お茶を。」

即ち彼の名を呼んで、同い年で月だけは年上の従
姉が一碗の茶を勧めた。銚三は逗留中、其の家に宿
つて居た。……若旦那は、従姉が少い時の長
女の婿で、先刻は其の若夫婦と従姉とが同伴であつ

た。――紅梅の寮へ寄ると言ふので、女たちは故とはづして歸つた。――

「恐縮でしたな、それぢや……」と云つた。が、些と腑に落ちぬ。京の都踊の番組にある如く、茶席は別にしつらへたのを、故らに棧敷に運んだは、先づとして、緋の袱紗を棒げて來のを、うつら／＼覚えて居るのは、高髻、濃化粧で、錦の帯を豎矢の字にしたお小姓の十八九、もの腰も、色の氣合も、雪間の若菜で、こゝなる柳の姿でない。

「はあ、私が持たして差上げました。」
果然。

「ぢやあ、あの時分、貴方は茶席に。」
「あの……舞臺裏の後見に。」
「では、お師匠さんですな。」
「地づくりの……擬のです。」

待てよ、それだと音に聞く、懸下、某師團の師團長、何某中將の妾、三笠屋のお蘭とか、名代の艶色であらうも知れぬ。

「それぢや、今夜大切に、衣裳をつけない、紋着で、山姥を踊った方なんですな。」

「あら、體裁の可いことを。」

「何故。」

「嘘ばつかり、矢張り坐睡りをして在らしつ

た………」

「何を秘しませう。最可い心持に寐て居た時です。

怪しからん、餘りうつとりと成つて、横ツこけに、つれの十七に成るの、膝枕をしようとして、其の時は、やはり吃驚して目を覺すと、舞臺ぢや木が入つて、圓鬚に結つたのが。」

「今も然うか、柳の暗さに、鼈甲のさし櫛は、

「端然とお辭儀をなすつた時だ。」

「と、遮つて、唯一呼吸ひくと、幹にかゝつた手の撓

ひに、葉がさら／＼と皆動いた。川波が颯と鳴る、

と白襟の面影立つて、

「口惜い、私……無事に歸しはしません

よ。」

五

「御免下さい、……明晩、更に謹んで見物
します。更めて御意を得ます。」

閣下とも申さずに、つい御意を得ます、と言つた。

「御意を得ませんよ。」

お蘭であらう、其の女は、柳の雫に濡れた笑して、

「貴方は最う、東京へお歸りなさるんぢやありま
せんか。――今度入らしたのも、二十年ぶり
だと言ひますから、また何の年おいでなさるんだか
分りはしません。」

「そんな事を……何うしてね。」

「何うしてゞも一丁〔ちゃん〕と知つて居るんで
す。……踊がはねて、支度をしまして、紅梅
へ参りますとね、いまお出掛だと云〔い〕ふ處でし
たから、すぐにお跡へ來たんです。貴方は人に逢ふ
まいと提灯をお消しなさいましたけれど、此のね、
柳の小橋でお目に掛るつて事は、丁と此方で極めて
置きました。橋から向うへおいでなさいましたら、

無理にお引戻しも出来たんですよ。」

意外な事を澄して言つて、

「それだし、それに、あやめ踊も、最う今夜がおしまひなんです。千秋樂に、また珍らしいお客様が、はじめから寐て在らつしやるんですもの。新地の興行は、はなから睡らされたと同一ぢやありませんか。――随分一生懸命ですよ、新地中。――餘り

口惜いから、出来ないまでも、お目覺に……。お目覺ですから、そりや甘いには甘いんですけれど、番組にも何にもない、此の何年か、お客様なんかに見せた事のない、私が自分で立つたんですのに……。」

「大地震が揺つたやうに、棧敷も土間も、其のために、騒いだと、従姉が後で言ひましたつけ。此方は現だ。現の中に、私は火事だと思つて居ました。」

「え、何うせ、すつたん、ばつたん、地震や火事のやうな見世物です。――餘りお酷い。私も田舎ものゝ意地がある、此のまゝお歸し申しませんから。」

「平に、御勘辨を――從姉が熱いのを一本つけて、餛飩を煮ながら待つて居ります。些と晩飯に酔過ごして、晴の場所ので、ぐら／＼坐睡をしたのは、新嫁の娘を連れた其の従姉が、どんなに極りが悪かつたでせう。叱言は屹と其の方で申聞けます。其へお任せなさいまし。」

「馬鹿にしていらつしやる。……歸しませんよ！」

「では、何うなさるお考へです。」

「其の一銚子とお餛飩を、此方へお任せなさいまし。」

「斷つておことわりを申したら。」

「此なり、くひつきますから。一所に川へ落ちませう。……あのくらゐ恥かしい思をして、お弟子たち新地中の顔が二度と見られませんか。口惜いから、貴方を殺して私も死にます。搦つて、離しません！ 水の中ぢや、貴方は火事です、緋鯉にお成んなさいまし。……私は鯰に成りませう、地震ですもの。」

柳が動いて、

「口惜いねえ。」とすゝり泣く聲がする。
柳生銑三は興を覺した。此の婦、酔つて居

る？……

「事實、其の火事の次第を話しませう。姉さ

ん……で構ひませんか、御新姐ですか。」

「否、私は幽霊。」

「お幽さん。」

「は。」とまた幽な打笑む氣勢。

「あの女紅場ですがね 昔、彼處が寄席だつたのを御存じですか。」

「聞いて居ります。漸とももの心覺えました時分ださうで。」

「七歳ぐらゐな時でした。其處へ、東京から來た講釋が掛りましてね、眉毛の太い、色の淺黒い、瘦せた坊さん。名は覺えて居ませんが、黄金水大盡杯と云ふ題で、紀伊國屋文左衛門の中の、振袖火事と云ふ、江戸の大火を讀んで居たんです。」

畫席です、寺參の歸途に、一度父に連れられて聞いてから、續が聞きたくつて堪りません。母に小遣を強請つちや、毎日出掛けました。よく家でも出しましたね。」

「三枚橋で、美しい小姓に逢つた、其が通魔で。」
 と、言ひかけて、大川の水に何となく薄明りの映すのを視た。流の上を霽が通る。雨は霽つたのである。

「それから娘が戀煩ひをして、白菊を染めた、紫地の振袖を抱きしめるあたりから、幾日通ひましたかな。今で言つては可笑いけれども、圓顔の小僧が、ちよこなんと胡坐して、神妙に聞惚れてるから、汗の腕まくりをして大火事を讀む、講臺の坊さんに、可愛らしく見えたらしい。眞紅な蓐を懷紙に包んだのを、樂屋から意氣な女房に持たせて寄越しました。丁ど、圓山から、お茶の水の聖堂と云ふのへ飛火をして、ぐわら／＼と燃え上る、火の手は八方へ炎を分けて、外神田、内神田、今川橋を越して小傳馬町を一舐めに淺草見附へ燃抜ける。江戸の町中が焚けるのに、七月の暑い盛だ、聞いて居ても火の中に居るやうで、露を吸つちや呼吸を吐いた、其の時の蓐の味と言ふのはない。

と、思ふ處へ、緋の袱紗でお茶が出たんだ。私は
苺だと思つた。ちらりと見た舞臺は、一面の花盛、
キネオラマの仕掛か何かで、さら／＼さら／＼涼し
さうな水が湧いては流れ湧いては流れするもんだか
ら、火事に龍吐水を注いでるやうに視め／＼、酔心
地にとろ／＼と振袖火事の講釋を聞いて居たんで
す。．．．．それ櫻川が新曲なんざ、まるで耳へ
入らない。合の手に鉦が入つて、カンチキチン、カ
ン／＼チキチンなどゝ鳴るのが、此方は摺半鐘早鐘
です。火事頭巾ぢやあるまいし、花笠で踊つてなん
ぞ居られますか。――御免なさいよ。しかしそ
れは決して今の私ぢやない、小兒なんだ。が、鬚
の生えた野郎が猿のやうに酔ひしれて、坐睡をして
居たんぢや憎くなくもなからうけれど、悪しからず
思つて下さい、小兒ですから。」

「否、憎らしうございます、小兒衆でも。．．．
．．貴方は、然うして面白がつて聞いておいでなす
つたのを、講釋師の坊さんが喜んだとおつしやるん
ぢやありませんか。小兒衆だけに、一層そりやどん
なにか嬉しかつたでせう。．．．．私かつ

て・・・私かつて、其の、小兒衆がちよこな
と胡坐かいて見て下すつたら、どんなに嬉しかった
か分りません、それだけに尚ほ、なほ私は一口惜

《くやしい。》

銚三は少時言がなかつた。

「私が山姥を立ちました時も、矢張り江戸の火事
でしたか。」

今は地震だとも言へなかつた。

「其の紅い蓐を御覽なすつた。――薄茶を差上

げましてから、餘程、間がござんしたよ。」

「眞個の事を申しませう。・・・其の時は
最う火は消えたんです。火事は済みました。・・・

・紀伊國屋の支配人長五郎が腕を見せて、大金を
一時に儲ける働きも忘れしました。が、唯残つて居る

のは、こがれ死をした娘の一念、燃えながら天に昇
つた紫の振袖です。虹は勿論、徂徠ふ雲の白いのを

見ても、飛ぶ鳥の翼を見ても、皆それが宙を通る振
袖に見えて忘れられない、幾年も／＼。小兒は何時

までも恍惚と空を見るやうに成りました。夜は、星
のなかにも、其の振袖がちらついで。さうした時は、

明星が、其の白菊の模様でした。

其の中に、私は美しい袖を見ました。其の袖に、緋の襲衣が重つても、島田の手絡が紅鹿子でも、決して其が、燃えるものではありません。が、此の故郷に唯一人、其の袖ばかり見えるのが、まるで、江戸の空に燃えながら靡いた、と云ふ、振袖を見ると同一やうに思はれたんです。

其の袖は、私の目に炎よりは輝いたのです。けれども、月の光でした。片袖は峰の三日月、まむきの姿は明月でした。光は、こんな、一葉の草にも浸透る、けれども手に取られず、近づけないのは、空の影と同一でした。

江戸の娘は豪かつた。唯戀の一念に、三十萬軒の家を焼き、八萬の人を焚投した。が、此の國の小児はだらしはない、積る思は野山を埋む雪と成つて、やがて朝日にも夕日にも、果敢ない水の陽炎に消えました。

否、消えはしない。此の水上の、醫主山、寶達の

山やまに今いまも白しろく残のこつて居ゐる。
「

「僭上なことを言ふやうですが、……やがて、其の醫主、寶達の雪も溶けて、鮎を棲ませて流れませうが、爾時は、眞夏の白山を御覽なさい、戀を封じて、陽の前に純白です。」

袖は、靨黷いて居ます、美しい雲のやうに。其の白山の中空にも。

山姥を、山姥を貴方が、と揺起した従姉の口から聞いたゞけで、私は熊も金時も分らなかつた。唯、白山の雪を思ひました。……氣も心も爽かに成つて。酔覺ですな。」

銚三は柳をかけて、瘦せた肩を震はした。

「……覺めると幕が下りたんです。……悪しからず思つて下さい。……其の袖の見えますのは、二十年の昔も今も些とも變はないのですから。——あゝ、恚う云ふ中にも。」

彼は水の面を差覗いた。けれども、然うするだけに、手探つて、柳の幹に縋らねばならなかつた。氣勢は、婦と手が並んだやうである。

「たしか、遠くない此の上流には、白菊の瀬と云ふのがある筈です。思へば、それを、模様にして、暗い水が紫に流れるやうです。」

非ず、雨上りの薄明りに、波の面は藤色であつた。

「こんなですもの、貴方の姿だつて、同じ色の袖に見える。」

實際、其の時朦朧として、緑のすだれ繁きが中に、おなじ色の姿が見えた。鼈甲の照る圓鬚の艶、襟の白さもほのめいたのである。

唯、幹の其の手に、婦の手が、柳絮の散るかど、かゝつたので、銚三は、ふと片手で、忙しく袂を搔探つた。

「……マツチ……マツチをもちぢやありませんか。」

指のしなひで、軽く、銚三の手を二つばかり密と叩いて、

「……黙つて在らっしゃい、黙つて。」

と、お蘭は低聲で言つた。

爾時、丁ど紅梅の寮の門の前を、向うへ渡す――
大橋ではない――京の四條の團栗橋に擬へた
と云ふ、近頃かゝつた夜目にも新しい小橋の上へ、白
い提灯、紺蛇目傘、人影が五六人。
「灌山の若旦那が歸るんですよ。」
< Ruby > 冴えた女の聲が響く。

「千鳥が鳴くやうですね。」
と、言つた。

三聲、五聲、聞くうちに、一群は、墨繪を巻取つ
たやうに橋向うへ、女紅場の袖を、山の裾の小路へ
隠れる。

瀬の音立つて、四邊は死んだやうに寂寞した。柳
の絲は静まつた。

「柳生さん。」

何も知つてる。銚三は怪しみもしないで答へた。

「私は悚氣としましたよ。」

おくれ毛も幽にかゝる、お蘭は少し俯向いて、

「餘り思詰めて在らつしやるから。私の胸にも、

私の手にも、ちらく雪がかゝりました。あの・・・

・そして其の、袖は、此の土地のお方ですか。」

「然うですとも。」

「御機嫌で在らつしやる。」

「存命です。」

「あゝ、よく、ねえ。」

と、吻と吐息ついたやうに云つて、「……」

お幾つぐらゐる……もうお振袖でないのは分つ

て居ますね。」

「勿論ですとも。しかし、たとへて可いか悪いか

は分りませんが、女體の神佛の端麗なのに、男の目

で見ても自分より年下と思ふのは嘗てありません。其

のかはり年老いたと云ふのも決してないのです。」

「えゝ、右に左、屹と年上の姉さんでせう、お幼

い時の戀だから。――そして、誰方、何方の方、

貴方。」

「――」

「聞かして下さいませ、後生ですから。」

「否、しかし、それは言ひますまい。」

「あゝ、屹と他家の奥様ですね、お年頃が。」

と、忘れたやうに指を折るのが、ちら／＼と白し、

今や、薄月夜。

「さあ、或は然うかも知れません。」

「だつて、可いぢやありませんか、他家の奥様だつて、其の御様子では、つけぶみをなさるんぢやなし、心で思つていらつしやるのに、些とも差支へはないぢやありませんか。」

柳生の心は然うではなかつた。人に言ふのは、結晶した峰の雪の其の一片を散らすのである。

「ねえ。」

「御免を蒙りたいのです。」

「あゝ、明けて名をおつしやるのは、封じた雪をお解きなさるやうで口惜いんでせう。一寸、蓑を着たいほど、私に雪をかけて置いて。」と、其肩を手で庇ふやうにした。

「今更お惜みなさいますのは、そりや貴方、罪ですよ。」

「罪以上だとは知つて居ます。」

「では、何うしても仰有つては下さらない？」
其の語氣が、最う一度聞返すと云ふのでなしに、聞くやうにして聞いて見せやう、我に迫つた力が籠つ

た。

唯、白い手を密と上げて、柳がくれに、軽く、何
處かを招いた、と思ふと、溝端に石臼と思つたのが、
むつくと立ち、雨樋と見たのが、軒を離れ、松の根
らしいのが、ぬつと動いて、前途なる小橋の詰、壁
の間、背後の土手の陰などから、三五人、外套に頭
巾着たり、莫塵を纏つて頬被りしたのなんぞ、影が
むら／＼と動いて出た。

距離の最も近かつた、其の頬被りしたのが一人、
跣足で、ぴた／＼と前へ出た。

柳生は驚いて目を二る。

「マッチを持つておいでかい。お客様が煙草をあが
りたいのですつて、……無ければ誰か……」

「あります。はい。」

手に渡す時、手拭を取つたのは、横肥りした屈竟
な壮い男で、太い眉の下に、光る目を、ぎろりと柳

生なまに注そくいだ。

「あゝ、難ありがた有うう、――可ようござんす。」

壮さうし士しは一つ、手て拭ぬぐの雫しじくを膝ひざで切きつて、あとへ退さがると、潜ひそむものは潜ひそみ、踞しゃがむものは踞しゃがんで、雨あめ上あがりの雲くもの影かげに成なつた。

柳やぎふ生ふは舌したを卷まいて、ものをも得え言いはず。

「貴あなた方なた、あの中うちの一人ひとりが、此この危あぶない橋はしの上うへで、一ひとツ貴あなた方なたに突つき當あたつたら何どうなさいます。」

「死しんで了しまひます。」と、些ちと自や棄けに言いふ。

「然さうすりや、私わたしは貴あなた方なたには生いのち命めいの恩おん人じん。」

「癩しやくに障さはるから此この流ながれへ打うち込こむのを……計ゆるして下くださる、で、其それがために坐いのち命めいの恩おん人じん？」

「否いへえ、外ほかに大おほ勢せい貴あなた方なたを狙ねらふものがありますから、恚かうして、此こ方ちうで御ご守し讓じやうを申まをすんです。」

「狙ねらふもの、私わたしを。」と餘あまりの事ことに、彼かれは聲こゑさへ切せまつて言いつた。

「貴あなた方なたは、今けふ日び、お午あひる頃けいに、此この土と地ちの人ひとだちの心こゝろ持もちを悪わるくさして、怨うらみをお買かひなすつた事ことがありませうね。」

「思ひも寄りません、まるで、些とも。」

「お忘れなさいましたわね、貴方が覚えていらつしやらない事を、或人たちは、お身體さへ狙つて居ますんですよ。」

「人違ひだと思ひます、其こそ確に。」

「それでは申しませう。土地第一の寺院へ、何某の伯爵夫人と云ふのが、今日お乗込に成りました。

北陸婦人會の臨時總會と云ふのに御臨席に成るのです。昨日、一昨日あたりから、土地の何々と云ふ人たちが、白襟紋着で出たり入つたりして居るのは、皆其の夫人をお迎へ申す準備でした。

入らつしやるお寺は、貴方の従姉御のお家に近い。狭い町が御通りの花道です。軒を打つて、旗、提灯、幕だの金屏風だの、道へは水を打ちました。・・・

・
・
兩側に人垣を造つて、お爺さん、お婆さんたちは皆土下座をして居ました。娘さん、嫁たちも、親、舅、姑の掟で土下座をしたのもあります。――
横から蟻一つ這はないお通筋。

婦人ばかり八九十人、前後に白襟紋着の、お供の
俵が揃つて、其の寺町へ、遠い山へも道を曳いて、
雲から舞下つて伸した處へ、向うから唯一人、杖を
支いて、肩を斜つかひに突掛つて來た方がありまし
たつけ、あれは、誰方。
「

暫時、決して其は、肩を斜違にして突掛つた次第ではない。久しぶりの、もの珍らしい町の状に、見物の目のうか／＼して、茫然出先から歸つて来て、思掛けず八夕と其の貴夫人たちの一行に出逢つた。

唯、心着いた時は、前驅が四五臺抜け越して、正しく擦違つた一臺の俣の兩側には、紋着の羽織袴、白緒の草履、それに、高帽子を冠つた不思議な小父さんが二人づゝ左右に泥除に縫るやうにして呼吸を切つて駈けて居たが、二人俄然として立停まつた。俣も、留まると、突如、其の二人が、柳生の兩腕を確と掴んだ。

「無禮ものめ。」

「退れ。」

「何だ、天下の往來だい。」

柳生は思はず眦をキリゝ、と切つた。

「踏殺せ。」

「撲れ。」

と、喚いて、奉迎の垣が左右から、眞黒になつて柳生の前後に崩れかゝつた。

「却つて失禮です、却つて失禮です、お静に………俾を疾く。」

と、後列の四五臺めと思ふ處から清い聲して一人の女が叫んだ。波を疊んで打つやうに、俾が一齊に動出して、柳生は一人、沖へ船足を眞直に切つて通つたのである。

手と手は幹にありながら、柳の隔がもどかしい。銚三は、熟と其の顔を瞻つた。

「お分んなすつて、——私はお顔を覚えて居ます。………お互に、まあ、………伯爵様には、お世話に成らない、いゝ時に生れたんですけれども、當地では然うは思ひません。………それにね、何ですか、いつかのね、議會の選挙に運動して、まけた方の、まけ腹の有志家壮士等が、こんな時と思ひますから、何の彼のツて危いわ、貴方。」

若旦那や從姉御に、お聞かせ申すと、唯御心配を
なさいますから、内證で私の心ばかり。．．．
ですが、手配をいたしました。御歸京の汽車に召す
まで、決してお案じなさいますな。」

此のみづからがあるからは、百萬勢と思召
せ．．．．

お蘭は師團長ながし中將の妾であつた。中將に
は正室がなかつたのである。

柳生はかなぐるが如く帽を取つた。

「眞個、生命の御恩を被りました。」

「ですから、私に、其の貴方の、その袖のお方を
聞かして下すつても可いでせう．．．田舎もの
は恩に被せるものですわね、ほゝゝゝ。でも、ほん
の燐寸をおたてひき申すぐらゐな事なんですー

めしあがれ。」と、パツと擦つた．．．お

蘭はいつか下に居て、黒小袖に庇つた火は、錦の帶
に輝いて、柳がぐれの袖の影に、一炬、篝火の如く
銚三の瞳に燃えた。頸の雪もちら／＼と、．．．

衰と言つたを思出す。．．．濡れたやうなが窠
れて見えて、聲と容子を思つたより、年紀やゝ長け

たも可懐い。

「あれ、遠慮をなすつて、消えたではありませんか。」

消ゆれば、そつと月が映す・・・
や、白菊の花の影、小袖の色も藤紫に、其の面影さへ似たのである。

銚三は戀を語つた。

「朝は菩提寺へ参詣しました。杉菜の中に線香を手向けましてね、従姉と二人で墓まゐりを済ませると、其の歸途に、寺に近い、あの麻野町と言ふ、御存じの此の流の裾にある町です。田圃に近い、場末です。小流のある辻から、それとなく、用たしをすると云つて、従姉を歸して一人に成つた、袖の、其の人を訪ねようと思つたのです。」

袖の姿は、いつも中空に消えませんが、戀も、白く山の峰に、其の月影を浴びて輝いて居るのです。が、近けない事は、夢に視ても、其の人は、御殿の中に、多くの女中に齊眉かれて居たり、それかと思へば、藤の咲いた紫の中に渡殿の橋にかくれたり、門と思へば山の如くに薨が高し、垣と思へば濠が深し、城の中に居ると同一で、幻にも、姿も顔も見ることがなかつたのです。――近頃不思議な夢を見ました。

晝とも夜とも分らない、寂い裏町とも思ふのに、

青^あいが煙^{けむ}るやうな生垣^{いげがき}つゞきに、白^{しろ}い石^{いし}の輪^わの井戸^{いど}があつて、其^{そこ}處^{たけざを}に竹棹^{たけざを}に縋^{すが}つて、後姿^{うしろすがた}で、すらりと立つて、―― 恚^かう水^{みづ}を見て居^ある、優^{やさ}しい、美^{うつく}しい婦^{をんな}があります。不^ふ思議^{しぎ}な水^{みづ}仕業^{しわざ}、確^{たしか}に其^{その}人^{ひと}だ、と思^{おも}ふと、夢^{ゆめ}だから遠慮^{えんりよ}はなかつた、時^{とき}に自分^{じぶん}はと見^みると、學^{がく}校^{かう}通^{がよ}ひの生徒^{せいと}です。

「汲^くんであげませう。」と云^いつて、飛^{とび}つくやうにしたと思^{おも}ふと、何^{なん}にも居^あない。井戸^{いど}側^{がは}は眞^ま白^{しろ}に乾^{かわ}いたのに、濡^ぬれ手^て桶^{をけ}に汲^くたての水^{みづ}が半^{なか}ほど、それに圓^{まる}い月^{つき}が映^{うつ}つて居^あました。……笑^{わら}つては不^い可^けません、餘^{あま}り果敢^{はかな}さに涙^{なみだ}を流^{なが}すと、冷^{つめた}い枕^{まくら}に目^めが覺^さめたんです。

いとせめて戀^{こひ}しき時^{とき}は烏羽^{うばたま}玉^{たま}の――

私^{わたし}は裙^{すそ}を返^{かへ}して寝^ねて居^あましたよ。馬鹿^{ばか}だね。

今^{こんど}度^ど、當^{こつち}地^ちへ來^きて、それとなく聞^きくと、其^{その}人^{ひと}の縁^{えん}づいた家^{うち}は、城^{しろ}の陥^{おち}つたやうに滅^{ほろ}びて、御新造^{ごしんぞ}は、實^さ家^とへ落^おちたのだ、と言^いひます。其^{その}實^{じつ}家^かも、私^{わたし}の知^しつて居^あた頃^{ころ}とは違^{ちが}つて麻野^{あさの}町^{ちやう}へ、と云^いふのが今^{けふ}日^た

訪ねた處なんです。

番地も、よそながら聞いて居ました。が、一軒々々、
が、密と門札を見て歩行く心をお察し下さい。眞晝
間、間者に成つて、敵陣の中を窺つたつて、こんな
に、どき／＼胸の動怪はしますまい、と云ふ中にも、
あの邊は場末です、禿げた格子、崩れた廂を見る毎
に、捜すものが、捜しながら、こんな家でないやう
に、と其の人のために祈るんですから、違ふ度に吻
とする。――一二度、聞いたが知れません。出
外れると原に成つて、此の川が瀬を掬まして流れて
居ます。思切れないで、もう一度あとへ引返すと、
向うから、薪屋だと見えて、老人が一人、此の陽氣
に袖なしのちゃん／＼を着て、薪を一束背中に背負
つて、杖を支いて來ました。其が奥山で木樵に逢つ
た氣がしました。……此の雨の所為ですか、
土塀の崩からは、ひら／＼陽炎が立つ癖に、陽の色
は白く透過つて、手足は熱いくらゐなのに、袖がひ
や／＼と寒いのです。聞くと振返つて、大な檜の樹
を教へたんです。その狭い路を入れと言ふ。

おほき 大な樹で、此の影が映す為か、小路へ入ると月夜のやうに道が蒼い。教へられた處に、犬小屋同然なのが引傾がつて、おしめが乾してあるから吃驚したが、空地を措いた其の隣家で、可なりな構です。

その人の兄の家です。此の人と、以前一寸知合でした。此方ばかり氣が咎めるから、年始状さへ出した事が無い。

と、言ふんですから、直ぐに案内が申せますか。二三度、行つたり來たりするのに、我ながら、犬にも踏まれず、芋蟲がころがつてる形に見えます。無理に羽を生して格子を潜つた、がらりと云ふのが森とした處へ響いて、震上つた。

すぐに框が開いたんです。誰だと思ひます、十三四の可愛らしい少年が、丁と、行儀よく、お辭儀をしたので、「お宅ですか。」と唾が乾いて漸と言つた。

「え、留守ですが。」と聞くが否や、何と思つたか飛出して遁げました。が、身體中瀧のやうな汁に成つて、眞暗に駈出すと、路傍の桶屋の竹箆にび

しりと^は 匆^はねられて、
一^{ひと}つ^つ怒^ど鳴^なられて又^{また}遁^にげました。
」

「此の下流の、三つ目の、小橋と云ふの、上まで来て、流に枝垂れた柳越に、醫王山の雪を見ると、欄干に凭れながら、何とも言ひやうのない涙がひとりでに落ちたんです。

石垣の上に石垣を積んで、も一つ高い石の塀は、いまの人の城でした。下はもの凄い淵なんです、誰かの思でせう。

よせばいいのに、いき休めの煙草を飲んで、うつかり、その柳の瀬へ、煙管を落して了つたんです。せめて蛭には化けますまい。

まだ未練らしく、大廻りして、坂へかゝつて、其の城の大手の木戸と云ふのを遙に視ながら、藪疊を潜つて屋敷町へ抜けました。

寂い處です。崩れた土塀と、まばら垣ばかり。誰にも逢はず、正午頃だのに人通も何にもない。家々の背戸も庭も李の花が盛でしてね、少し薄青味のあ

るのが交つて、まるで暖い雪なんです。道は、それよりも乾いて白い。

辻に、四方から李の花の咲満ちた角の所に、夢で見たと同じ形の石輪の井戸が缺け／＼に成つて曝されて居ました。何故か、あのくらゐ寂しいものはない。其時さし棄の竹の釣瓶に縫つたのは、夢の其の人ではなくつて私でした。

ちら／＼と李が散るんです。白山が雲に高い。

俯向いて覗くと、緋の手柄が水底に映つた。十六の時分れたまゝの。はつと顔を上げますとね、陽が朦朧として宛然畫の月の影です。

飛込んだか、落ちたか知れない。

白い胡蝶が、ひら／＼と頬を打つて舞ひました。なくなつた母が留めましたか、従姉が呼びに来たんでせう。案じて居てくれますから、お誂の、晝の煮ものゝ冷めないうちに。

李すもの花はなの散ちる中なかを、其その胡蝶てふくの行ゆく方ほうへ、ふら／＼と歩ありて來きながら、あゝまだ情なまけない。――

あの時とき出迎でむかへたのが其その人ひとだつたら――まだ家いへを捜さがす時ときのつもりで、何處どこかの門札もんふだを覗のぞくと、赤間あかまとしてありました。字じを見みたばかりで、李すもも蝶てふも眞まっ紅かに成なつた。緋手ひて絡掛がらけた結綿ゆひわたが一足ひとあしさきへ、・・

目めも血走ちばしつて居ゐたんでせう。其その耳みみへ、ぐわんと響ひびいて、あの――

「無禮ぶれいもの。」を啖くらつたんです。

――誰だれにも申まをさない事ことです。――貴女あなたは恩人おんじん

ですから・・・

「澤山たんとおん恩おんに被きせましたね、田舎あなかものだ、とおさげ

すみなさいませう。」

「飛とんでもない、雪ゆきの消きえない國くになんです。」

「あゝ、御果報ごくわほうな方かたですね。」

「迷惑めいわくのだん察さつして居をります。」先せんには其その

御新造ごしんぞさんにお目見得めみえをいたしました。近ごろも御ごよ容子うすが、花桐はなぎりの香かのやうに、高たかい處ところから聞きこえます。

おうつくしくつて入いらつしやいます。あの、氣高けだかいのに、勿體もつたいないんですけれども、貴方あなた、あやからし

て下さいまし。」

二人は熟と手を取った。

「お怨みは解けました。が、此の手も解かなければ成りませぬまい。—— 貴方お見送りはいたしません。私を見送つて下さいまし、では……然やうなら、お坊ちゃん。」

颯と小走りに土手を行くと、松の枝にかくれた影を、やがて橋に曳いて唯一人、越路一番踊の上手、若く艶なる山姥が、山際近き月下の橋を、袂を拂つて行く姿。

時鳥より冴えた聲を、梢の雲に投げかけて、

忘らるゝものならば、
わすれたいわいなと目に涙。

白菊の瀬は彼方に、と見ると、水の紫が、月に颯と町の方へ。

傘からかさを袂たもとに、橋はしにかゝつて、思おもはず銚せんざう三さんがさしうつ
むくと、廂ひあはひ合あの樋とひ竹だけも、路みち傍ばたの石いし臼うすも、土ど手ての上うへの
松まつの根ねも、齊ひとしく一い揖ふして彼かれに頷うなづいたのである。

【完】